

新出資料竹苞楼旧蔵板木台帳紙背

『覚勝院抄（断簡）』解題

―覚勝院抄系統論への新提言―

上野英子

『覚勝院抄』の断簡（以後、竹苞楼本と仮称）が発見されたのは、平成二三年のことであった。奈良大学の永井一彰教授が、寛延年間の創業という京都の古書肆竹苞楼が所蔵していた版木約二五〇枚とその仕入簿等を調査・分析し、板木台帳の紙背から幻巻の後半部と匂兵部卿巻の全冊、丁数にすれば約三五丁分に相当する資料を発見されたのである。そして教授の御厚意もあって、本研究所ではこれまで二度にわたってこの資料の紹介を行ってきた。即ち調査報告九十五―二では永井教授による当該板木台帳の解説や発見の経緯を冠して、竹苞楼本の書誌と影印を紹介し、調査報告九十五―二では竹苞楼本の翻刻と諸本校異を発表した。^{注1}今回はこれらの結びとして、当該資料の本文に関する分析結果を報告する。

『覚勝院抄』の諸本をどのように分類するかについては、これまで野村精一氏と岩坪健氏によってそれぞれ試案が提示されてきたが、本稿では竹苞楼本を元にした諸本の分析を通じて新たな問題提起を試みようと思っている。なお

本稿で用いる『覚勝院抄』の本文異同に関する丁数や通し番号は、調査報告九十五―二で発表した翻刻の丁数や校異欄の通し番号を踏襲した。これは異同の発生場所を端的に明示するための処理であり、併せ参照していただければ幸いである。

(一)

室町末期に成立した『覚勝院抄』は、源氏物語の全ての本文を掲げて、そこに三条西家の諸注を配した資料である。物語と注釈とを併せ持った資料は、『岷江入楚』や松永貞徳監修後の『万水一露』、江戸時代に入ってから『湖月抄』などもあげられるが、『覚勝院抄』の成立はこれらに先んじる。同書巻頭に「時代 寛弘初造出之 康和流布〔寛弘ヨリ文明十年迄百八十余年也／然者元亀マデハ五百七十四歳坎〕」とあり、この元亀二年（一五七一）をもって成立の目安とされるからである。

『覚勝院抄』以前の注釈書は、物語本文の問題となる箇所を抜き出して掲出語（見出し語）とし、それに注を付けていくのが一般的であった。従ってこのような形式の注釈書を利用するためには、利用者（読者）側でも別途源氏物語の本文を用意しなければならぬわけだが、印刷技術が導入されない、写本の時代のことである。読者側で用意した物語本文と注釈書が依拠した物語本文とが同一である保証はどこにもなく、さまざまな齟齬が生じたりうことは容易に想像が付く。それだけに、注釈書と物語本文とを一体化させた『覚勝院抄』の試みは、当時にあつては極めて画期的な方法だったといっても過言ではないだろう。本書が、三条西家の注釈を集成した源氏物語のテキストとも、あるいは物語本文を伴った三条西家の注釈集成とも位置づけられる所以である。

さてかかる『覚勝院抄』の諸伝本は、端本を含めて現在一九種ほど確認されているが、それらをどのように分類し系統づけるかについては、これまで野村精一氏と岩坪健氏によつて次のような案が提示されてきた。両者は、諸伝本を三つに大別したこと、またそれぞれのグループにどの本を配するかといった振り分け方については一致しているものの、三つの群の位置づけと名称において大きく異なっている。^{注2)}

【表1】 従来説の対照

| 野村説 | 岩坪説 |
|----------------------------------|---------------------------|
| 初期稿本系 流布通行本系グループ 後期増補本グループ | 穂久邇本系 流布通行本系 後期増補本類 |

野村説によれば、箒木巻にある大量の青・朱墨書き入れ注をはじめとして、様々な書き入れを有する穂久邇本は「単なる書本を傍らに置いての一回的な書写にとどまらぬ、積層した書写過程を示」しており、「原初的性格」を有するもつとも古い初期稿本であるとする。そしてかかる穂久邇本を厳密に引き写しているとみられるのが宝永二年の国会本と万治興書本であつて、これら三本を〈初期稿本系グループ〉と一括、これに対して「稿本性よりもむしろ証本ないし定本として整序しようとする意識」で書写されたのが〈流布通行本系グループ〉であり、更に近世国学者などが『湖月抄』や『玉の小櫛』等の新注類までも独自に書き加えたものが〈後期増補本グループ〉であるとしている。

但しこの野村説は、三つのグループ相互の関係については何も言及していない。〈初期稿本系〉を「原態」とは表現したが「原本」と明言したわけでもないし、〈流布通行本系グループ〉〈後期増補本グループ〉の書本に関しても、「(通行本グループの特色は^{一稿者注}) 箒木巻の青墨書き入れなどの第一群三本に共通する特色を持たない、ということ

であり、その余については、…大略形式的に（初期稿本系と^{「稿本注」}）一致を見る」と言及する程度である。かかる野村説は、いふなれば『覚勝院抄』の諸伝本を特色に応じて三つの群にわけ、各群の特色を抽出してみせたものである。

一方、岩坪説では、穂久邇本を「諸本の中では当本の書写が最も古」とはするものの、穂久邇本が原本である可能性については完全にこれを否定された。そして『覚勝院抄』の基本形はあくまでも〈流布通行本系〉にあり、この基本形に「後人が青・朱注を加えたもの」が〈穂久邇本系〉の三本であり、諸人が「後世の注釈書を引いた」ものが〈後期増補本類〉であるとする。この岩坪説によって、三つの群の成立関係に関する具体像が、初めて提示されたと見えるだろう。

そして注意しておきたいのは、野村説が、穂久邇文庫本の青墨書き入れも近世国学者らによる増注も「総体として『覚勝院抄』の世界である」と包括的に扱っているのに対して、岩坪説では、基本形に付加された後人注記はすべて『覚勝院抄』本来のものではないとしている点である。おそらくこの相違は、本文史の動態を学として対象化しようとしている分類論か、書承関係を前提とした書誌学的処理に基づいての本文系統論か、という両者の立脚点の相違に基づくものようである。

そこで初めに、本稿での立場を明確にしておこう。本稿の目的は、新出資料である竹苞楼本について、その本文が『覚勝院抄』諸本の中で如何なる位相を占めるのかを明らかにすることにある。だが板木台帳の裏紙から発見された竹苞楼本は、「幻巻」後半の一部と「匂宮」巻のみの零本であった。問題の発端はここにある。

なぜならば、〈初期稿本系グループ〉ないし〈穂久邇本系〉の特色であるところの青墨書き入れ注（所謂「三大」の肩付きを有する書き入れ注）は、『覚勝院抄』の前半の巻にこそ見られるものの、「幻」「匂宮」になるとどの諸本

にも存在しなくなるからである。(後期増補本類)の場合も然り。例えば両氏によってこのグループに位置づけられた常磐松本だが、肝心な後代書き入れは前半に集中し、「幻」や「匂宮」といった後半の巻々になると殆ど見られなくなるからである。

よって竹苞楼本の場合、青墨書き入れ注の有無や、後代書き入れの有無によって分類した従来の論をそのままではめるわけにはゆかず、諸本を一列に並べ、本文異同を通じての分析によらざるを得なくなった。だがそれが幸いたように思う。この作業を通じて得られた知見をもって、本稿の最後にもう一度『覚勝院抄』諸本の分類問題へと立ち戻りたい。

(11)

竹苞楼本の翻刻を掲載した前号の報告書では、翻刻の下に【表2】に示す一一本との校異も記しておいた。このなかの九州大学図書館本は野村・岩坪両氏の論文発表後に加わった資料である。青墨書き入れ等を有するので、ひとまず穂久邇本と同じグループに入れておいた。なおここで用いた諸本の略号は、本稿でも踏襲することにする。

【表2】

| 諸本名 | 略号 | 野村説 | 岩坪説 |
|--------------------|-----|-----------|-------|
| 奈良大学蔵竹苞楼旧蔵本 | (竹) | | |
| 穂久邇文庫蔵本 | (穂) | 初期稿本系グループ | 穂久邇本系 |
| 国会図書館蔵伊達観瀾閣旧蔵宝永二年本 | (国) | 初期稿本系グループ | 穂久邇本系 |

| | | | |
|--------------------------|------------|---------------------|-----------------|
| 天理図書館蔵万治奥書本 九州大学図書館蔵本 | (万) (九) | 初期稿本系グループ (言及せず) | 穂久邇本系 (言及せず) |
| 書陵部蔵桂宮家本 | (書) | 通行本グループ | 流布通行本系 |
| 天理図書館蔵青谿書屋旧蔵本 | (青) | 通行本グループ | 流布通行本系 |
| 天理図書館蔵白水旧蔵本 | (白) | 通行本グループ | 流布通行本系 |
| 東京大学文学部国語研究室蔵本 | (東) | 通行本グループ | 流布通行本系 |
| 静嘉堂文庫蔵本 | (静) | 通行本グループ | 流布通行本系 |
| 実践女子大学文芸資料研究所蔵三条西旧蔵本 | (三) | 後期増補本グループ | 後期増補本類 |
| 実践女子大学図書館蔵常磐松文庫本 | (常) | 後期増補本グループ | 後期増補本類 |

これらの写本の「幻」「匂宮」巻の書写面を見比べてみると、同筆とみられる写本こそなかったものの、書写の様態はいずれもよく似ている。とはいうものの、丁替えや字詰めについて、竹苞楼本とは異なっている写本が四本あった。丁替えを例に比較してみると、次のような具合である。

- (書) ……片面一〇行。丁替えでは(竹)より約五行分ほど遅れる
- (白) ……片面二一行。丁替えでは(竹)より約五行分ほど進む
- (常) ……片面一〇行。丁替えでは(竹)より約一行分ほど遅れる
- (静) ……片面一〇行。丁替えでは(竹)より約七行分ほど遅れる

残る七本の丁替えは、ほぼ一致している。しかし字詰めまで一致しているのか、更に字母までかどうかとみてゆくと、さすがにそこまでのレベルになるとバラツキがみられたようである。だが漢字仮名表記法レベルにおいては、比較的よく揃っている。このことは現存『覚勝院抄』の「幻」「匂宮」が、ほぼ同質の系統だけでコンパクトにまとま

つていたことを予想させよう。室町末期の混乱期にあつて、物語本文を伴う大部なこの写本は、寺院の外に持ち出され転写される機会が少なかったためであろうか。ともあれ、書写面を見比べてのかかる印象が、果たして正鶴を射ているか否か、以下からは初めに統計面からの分析結果を述べ、次に個々の異同例を上げて解析してゆくことにする。

竹苞楼本を、諸本中最古の書写とされ、また唯一影印本が公刊されている穂久邇文庫本と比較したところ、「幻」巻で五七例、「匂宮」で一・二例の異同が抽出できた。尤もこの総数の中には次に示す3・6のような、訂正前の本文で比較すれば異同となる例、あるいは訂正前は同じでも訂正後の本文で比較したら逆に異同となつてしまつた事例も含まれている。

- 3 おまへ(竹)―おま(。へ)(穂)〔二六ウ〕
- 6 すちにゆけて(。を)そ(竹)―すちにつけてそ(穂)〔二七丁〕

(※頭に冠した算用数字は、前号の報告書(翻刻・考異)で各異同に振つた通し番号である。末尾の丁付も然り。対立する本文を―で結び、各本文の後には当該本文をとる諸本の略号を記した。)

そして、訂正前訂正後それぞれの異同例において、他の諸本がどのような動きを示したかを調査し、各諸本が竹苞楼本と一致した回数を計測した結果が【表3】、それをグラフ化したのが【表4】である。

一見して明かな如く、「幻」巻において竹苞楼本との一致数が最も少ないのは穂久邇本、逆に最も多いのが常磐松

幻巻の場合
竹苞楼本に対する諸本異同のうち、
一致数は…

【表3】

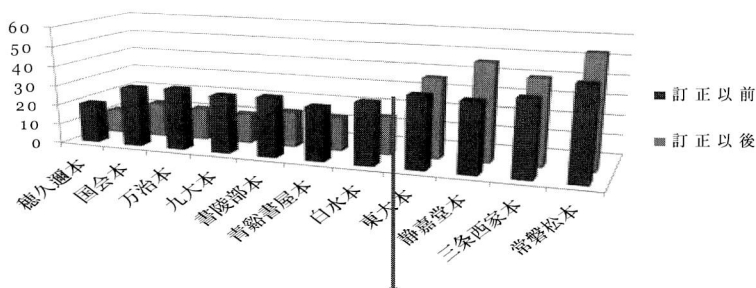
| 諸本 | 穂久 文庫 | 国会 本 | 万治 本 | 九大 本 | 書陵 部本 | 青谿 書屋 本 | 白水 本 | 東大 本 | 静嘉 堂本 | 三条 西家 本 | 常磐 松本 |
|----------|----------|---------|---------|---------|----------|---------------|---------|---------|----------|---------------|----------|
| 訂正 以前 | 20 | 30 | 31 | 29 | 30 | 27 | 31 | 36 | 35 | 38 | 46 |
| 訂正 以後 | 12 | 17 | 16 | 15 | 18 | 17 | 19 | 40 | 49 | 43 | 56 |

訂正以後、一致数が激減した

訂正以後、高くなった

幻巻：竹苞楼本に対する一致数

【表4】



本であり、それは訂正以前の本文で比べても、訂正以後の本文で比べても変わらない。よって幻巻の場合、竹苞楼本に最も近いのは常磐松本ということになる。

また興味深い現象として、(穂・国・万・九・書・青・白)の七本が、訂正以後で比較すると訂正以前より一致数が減少してしまっているのに対して、(東・静・三・常)の四本は逆に訂正以後の方が増加している、という点があげられよう。具体例を挙げていこう。

【用例1】 たいの御まへの紅梅は
いと(源氏物語大成) 幻巻一四〇
八頁⑤行目)

のくんだり、私に施した波線部分が、『覚勝院抄』の諸本は次のような対立を見せている（翻刻二八丁ウ 異同番号13）。

イ 紅梅はいと…国万九書青白

ロ 紅梅はいと…竹穂三

ハ 紅梅…東静常

（※見せ消ちは方法の如何にかかわらず、全て抹消線で表わした。以下同様）

イの諸本は、訂正以前の竹苞楼本とは一致しているが、竹苞楼本の訂正によって対立してしまった。逆にハの諸本は訂正以後の竹苞楼本と一致した。【表3】【表4】でいう数値では、（東・静・三・常）にはこうした例が多いということである。

参考までに、このくんだり『源氏物語大成』（以下『大成』と略）によれば、諸伝本は次のような異同を見せている。^{注3}

a 紅梅はいと…大

b こうはい…池肖三（河）

c こうはいを…〔別〕

『覚勝院抄』のイと同じ本文をとるのが大島本であり、ハと同じ本文をとるのが池田本・肖柏本・三条西家本といった室町期の青表紙本及び河内本系譜本である。つまり『覚勝院抄』の諸本は大島本と同じイの本文をもつ諸本（国・万・九・書・青・白）と、三条西家本らと同じハの本文をもつ諸本（東・静・常）とに分れ、イからハに移行したかその逆かは判らぬが、ロの諸本（竹・穂・三）はその過渡的様相を呈しているといえるようである。

【用例2】 らうたきものに心と、め給へりしかたさまにも〔大成〕幻卷一四〇七頁④行目〕

このくだり、『覚勝院抄』諸本は次のように本文が対立する（翻刻二七丁オ 異同番号5）。

イ 心と、め給へりしかたさまにも……徳国万九書青白

おほしたりしものをおほしいつるにつけて

おほしたりしものをおほしいつるにつけて

ロ 心と、め給へりしかたさまにも……竹

ハ 心と、めおほしたりしものをおほしいつるにつけても……東三静常（※但し常は「もの」を「物」、静は「たりし」を補入

イは本行の傍らに異文を並記したものの、ロはイの本行にミセケチをつけ訂正してしまったもの、ハはロの訂正結果のみを写したものとみることが出来る。本例の場合はこのように、（イ↓ロ↓ハ）へ流れていったと解釈するのが最も自然であり、その逆は考えにくいようである。そしてこのくだり『源氏物語』諸本はというと、

a 心と、め給へりしかたさまにも……大（河）〔保〕

b 心と、め給へりしかたにつけて……〔御〕

c 心と、め給へりしかたにつきてそ……〔麦阿〕

d 心と、めおほしたりし物をおほしいつるにつけて……池三

e 心と、めておほしたりし物をおほしいつるにつけて……肖

f 心と、めおほしたりしものをとをほしいつるにつけて……〔陽飯〕

と分かれている。細かな異同に目をつぶって大きく捉えると、『覚勝院抄』イロの本行と同じなのは大島本を中心と

したabcの諸本であり、『覚勝院抄』ハの本文「心と、めおほしたりしものとおほしいつるにつけても」と同じなのは三条西家本を中心としたdefの諸本のようである。つまり『覚勝院抄』イの諸本（穂・国・万・九・書・青・白）は、大島本のような本行と三条西家本のような異文とを並記していた。それが口の竹苞楼本を経て、三条西家本の本文を本行にもつようなハの諸本（東・三・静・常）へと移行していったと押えることが出来るようである。

用例3 それはかりならずいのちなかき人々にも（『大成』一四一七頁⑦～⑧行目）

のくだり、私に施した波線部分で『覚勝院抄』諸本は次のように対立する（翻刻四〇オ 異同番号26・27）。

イ それはかりならず：穂国万九書青白

口 それはかりそめならず：竹東三静常

そして『源氏物語』諸本は、

a それはかりならず：大

b それはかりそめならず：池肖三（河）〔陽保飯〕

c これをかりそめならず：〔麦阿〕

d それはかりそかならず：〔御〕

と分布するから、ここでも『覚勝院抄』イの諸本は大島本と一致し、口は三条西家本などと一致しているわけである。

イ 人々にも……穂国万九書青白東三静

口 人々にも……竹常

ここでは（竹・東・三・静・常）グループの中の（東・三・静）が（穂・国・万・九・書・青・白）グループに合流した。一方『源氏物語』諸本では

a 人々にも……大（河）

b 人（も）……池肖三〔別〕

となつて、大島本は『覚勝院抄』イの諸本と、三条西家本らは口の諸本と一致したようである。

以上『幻』巻の異同結果をまとめると、（一）竹苞楼本と最も親しいのは常磐松本であること（二）**用例2**などから竹苞楼本を常磐松本が写した可能性もあること（三）竹苞楼本との親近度からみて諸本は（竹・東・三・静・常）グループと（穂・国・万・九・書・青・白）グループとに大別できること（四）後者は大島本の影響が強く、前者は三条西家本などの影響が強いこと、等が見て取れるのではあるまいか。

（三）

今度は「匂宮」巻を見ていこう。竹苞楼本と穂久邇本との異同数は一一二例。うち『覚勝院抄』諸本が竹苞楼本と一致した数値をまとめたのが**【表5】**、それをグラフ化したのが**【表6】**である。

この表によれば、訂正以前でも訂正以後の本文で比べてみても、竹苞楼本との一致数が最も低いのは穂久邇本、逆に最も高いのは常磐松本であり、しかもその一致数たるや、常磐松本は穂久邇本の三から四倍にも及んでいる。竹苞楼本に最も親しい本文はここでもまた常磐松本とみて間違い有るまい。

【表5】

匂宮巻の場合
竹苞楼本に対する本文異同のうち、
一致数は……

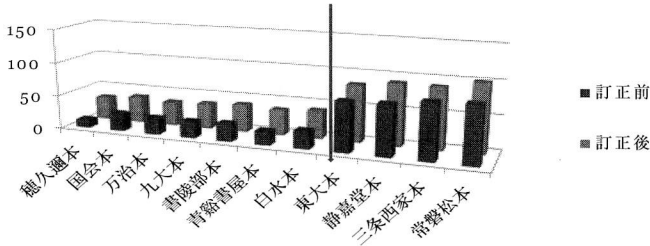
| 諸本 | 穂久 文庫 | 国会 本 | 万治 本 | 九大 本 | 書陵 部本 | 青谿 書本 | 白水 本 | 東大 本 | 静嘉 堂本 | 三条 家本 | 常磐 松本 |
|----------|----------|---------|---------|---------|----------|----------|---------|---------|----------|----------|----------|
| 訂正 以前 | 12 | 26 | 24 | 24 | 26 | 20 | 26 | 73 | 74 | 82 | 84 |
| 訂正 以後 | 34 | 39 | 35 | 37 | 40 | 37 | 41 | 84 | 91 | 90 | 101 |

訂正以後の方が一致数が高い

訂正以後：更に高くなる

【表6】

匂宮巻：竹苞楼本に対する一致数



では「幻」巻の場合のようなグループ分けが、「匂宮」巻でも可能であろうか。「匂宮」巻では諸本いずれも、訂正以後の本文で比較した方が一致数が増加している。但しその増加の割合をみてみると、グラフからも明らかなく、（穂・国・万・九・書・青・白）と（東・三・静・常）との間ではやはり一線がひけるように思われる。具体例をみてみよう。「覚勝院抄」物語本文では次のような異同例が起きている。

【用例4】 うちすみをせさせたてまつり給へと
と（『大成』一四二九頁⑩～⑪行目）

このくんだり、『覚勝院抄』諸本は次のように分かれて
いる（翻刻五〇ウ 異同番号25）

- イ（本行にナシ）…穂国万九書青白
- ロ（本行にナシ）（。うちすみをせさせたてまつり給へと）…竹（※傍書補入）

ハ うちすみをせさせたてまつり給へと…東三静常

『大成』によれば『源氏物語』諸本はいずれもこの一文を有しているため、この一文を欠く『覚勝院抄』イの諸本は物語本文の脱文と見てよい。それを補入したのが口の竹苞楼本、口の補入を本行化したのがハの諸本だとすれば、本例の場合も（イ↓口↓ハ）への流れを想定するのが最も自然なようである。「幻」巻と同様のグループ分けが出来る例である。

【用例5】 月の御念仏年に二たひの御八講（『大成』一四三三頁①行目）

波線部が『覚勝院抄』諸本は次のように対立している（翻刻五五オ 異同番号54）

イ 月に二たひの……国万九書青白

ロ 月に二たひ（。）の……穂

ハ 月（。）ことばにたひの……竹

ニ 月比ふたひの（ことこの）……東（※訂正方法は本行を削った上に重ね書き）

ホ 月ことこの……三静常

本例は諸本に訂正が多く、殊に竹苞楼本などは、補入した後で更にその一部を見せけちにするなど二重の訂正を施してはいるが、訂正以後の本文によってまとめると、『覚勝院抄』は「月に二たひの」とするイロの諸本（穂・国・万・九・書・青・白）と、「月ことこの」とするハニホの諸本（竹・東・三・静・常）とにわかれるようで、この群別はこれまで同様である。またこのくんだり、『源氏物語』諸本は

a 月の……大

b 月ことの……横為榊池肖三（河）〔保言飯〕

c 月ことに……〔麦阿〕

となつてゐる。『覚勝院抄』イロハニに見られた「二たひの」という本文が『源氏物語』諸本には皆無だが、おそらくそれは『覚勝院抄』が物語本文を写した際に、その下に続く「年に二たひの御八講」のくだりと目移りしてしまつたためだろう。そして（穂・国・万・九・書・青・白）の諸本は目移りのまま「月に二たひの」という本文を残し、（竹・東・三・静・常）は三条西家本らと同じ「月ことの」という本文を有したということだろう。

以上、物語本文に関する異同例をあげてきた。最後に注釈本文に関する例も紹介しておこう。

……………シカルヲ前々ノ巻ニ更衣ノ事葵上紫上以下ノ哀ナル事

用例6

雲隠といふ巻の闕事盆網経にも書の名はありてなき事在之（翻刻四八ウ 異同番号5・6）

これは雲隠巻について述べた巻頭注の本行部分である。脇には「シカルヲ前々ノ巻々ニ更衣ノ事葵上紫上以下ノ哀ナル事共書尽シタルニ依テ」という行間注が記されており、私に波線を施した本行の「書」とその行間注「更衣ノ事」の二箇所と連同して、本文異同が発生しているのである。分かりやすく部分写真で示そう。

【表7】が穂久邇本、【表8】が竹苞楼本である。穂久邇本は本行「書」に「シヨ」の振り仮名は無く、代わりにその右隣の行間注が「シヨ更衣ノ事」となつてゐる。おそらくこれは「書」の振り仮名を行間注の本文と勘違いしてしまつたための誤写だろう。穂久邇本が（原本）でないことは前述した通りである。

【表7】



【表8】



一方【表8】の竹苞楼本では、本行は「書」^{シヨ}、行間注は「更衣ノ事」と正しく記されている。そして「書」の振り仮名と行間注「更衣ノ事」に関してまとめると、『覚勝院抄』諸本は次のように分かれるのである。

イ 書の名は…穂国万九書白
シヨ更衣ノ事

ロ 書の名は…竹静
シヨ更衣ノ事

ハ 書の名は…東常
更衣ノ事

ニ 書の名は…三
シヨ更衣ノ事

ホ 書の名は：青

一致した動きを見せることの多かった（穂・国・万・九・書・青・白）の穂久邇本グループは、ホの青谿書屋本を除き、ここでも一致して誤写を踏襲している。例外となった青谿書屋本には、この丁の行間注が一切写されていない。あまりの細々しさに書写を放棄したものと思われる。これに対して（竹・東・三・静・常）の竹苞楼本グループは、ロハニに分かれた。ハは「書」の振り仮名を落としただけだが、ニの三条西家本のみ「書」に振り仮名「シヨ」をいれた以外に、行間注にも「シヨ」を入れている。それだけ本行と行間注とで書写が入り組んでいたということなのだろう。

このようにみえてくるならば、「匂宮」巻に於いても、竹苞楼本に最も親しいのは常磐松本であり、『覚勝院抄』諸本もまた若干の例外はあるにせよ、おおよそは（穂・国・万・九・書・青・白）と（竹・東・三・静・常）の二つのグループに分かれると判断することができそうである。

(五)

それにしても、かかる群別が起こったのはどうしてか、それを解く一つの鍵が『覚勝院抄』諸本の藤袴巻に貼付された、次の付箋かと思われる。次に穂久邇本で翻字してみよう。猶、私に句読点を補っておいた。

さおもひてと云より久我殿ノ本にて書之、夢浮橋迄可為此分。此本可然本之由、称名院殿もの給間如此也。是ヨリ前ハ拙者本にて書之、是も青表紙ナレ共校合然々被無之。於能州典厩ノ本にて写ス本也。又云桐壺卷ヨリ夢浮橋まで四辻垂相ノ本にて重而校合スル也、三四ヨリ冷ノ本ニテ披見合本也

『覚勝院抄』が採用した物語本文の書き本に関する情報である。これによれば、藤袴巻の「さおもひて」から夢浮橋までは久我殿本にて写した事。この本は称名院殿（三条西公条）のお墨付きを得た本文であった事。それ以前の巻々は「拙者本」で写した事。この本は能州典厩本を写したもので、青表紙本ではあるが校合を経っていないものだった事。そして桐壺から夢浮橋までの全冊を、四辻垂相本で校合した事、この四辻本は「三四」（三条西家の略か）と「冷」（冷泉家の略か）の本で見合わせた本文だった事などが記されている。

実際、『覚勝院抄』の「桐壺」「夕顔」「末摘花」「花宴」「葵」「須磨」「明石」「薄雲」「朝顔」「玉鬘」の諸巻（いづれも拙者本が書本だった巻である）には、「四大本」「三」「冷」といった肩付きを伴っての校合跡が散見する。注4例えば「玉鬘」（穂久邇文庫一〇〇才頭注部分）に

／＼ミユレハウレシクテ 此詞四三ノ本ニ無之／＼メヤスクテト斗在之

とあるのも、物語本文「みゆれはうれしくて」のくだりが、四大本（四辻垂相本）と三本（三条西家本）には「メヤスクテ」という本文であったことを述べたものだろう。「大成」（七四九頁^⑫行目）によれば、現行の源氏物語諸本は「みゆれはうれしくて」で一致し、日本大学蔵三条西家本だけがこの一文を欠き、「…いとめやすくて」となっている。

る。ともあれ、ここで注意したいのは、かかる校合の大半は物語本文の当該箇所記されているが、ここで引いた「玉鬘」巻の場合は頭注として記されている点である。おそらくそれは、本行「うれしくて」の脇には既に「源氏の御心也」という注が入っており、やむなく頭注に廻されたからだろう。

一方、今回みてきた「幻」「匂宮」の場合には、書本が称名院のお墨付きを得た久我殿本であったためか、肩付きを付しての校合例は無かった。しかし大島本や三条西家本といった同じ青表紙本系とはいえ、若干性格を異にする二種類の本文が、『覚勝院抄』所引本文中の異文表示や本文校訂によって散見できたことは、これまで縷々述べてきた通りである。

ということとは、『覚勝院抄』は物語本文を、任意の段毎に区切り、そこに聞書注を織り交ぜて編集した（すなわち『覚勝院抄』の最初の原型が成立した）のちに、物語本文への校合が加えられたということである。しかもそれは「三四ヨリ冷ノ本ニテ被見合」という四辻大納言（季遠か）本による校合だった。この「三四」が三条西家本の意味であるならば、『覚勝院抄』の訂正文本が現行の日本大学蔵三条西家の本文と重なる部分が多かったことも合点がゆくだろう。また「冷」を冷泉家の本とするならば、訂正以前の『覚勝院抄』の本文が大島本と重なる部分が多かったこともそうである。

こうしてひとまず原型が成立した『覚勝院抄』であつたが、校合と前後して複本も造られてゆき、その時に書写方針の違い等によって本文が別れてしまったものと思われる。幻巻と匂宮巻における現行諸本が（穂・国・万・九・書・青・白）と（竹・東・三・静・常）に分かれているのも、その影響であろう。

そして更に云うならば、穂久邇本などは、さらにその後、今度は「三大」などの講釈を受講したときに、当座のテ

キスト代わりに用いられたのではあるまいか。

なるほど、物語本文と聞書注の両方がついているのだから、受講用テキストとしてこんなに便利なものはない。現に穂久邇本をみると、「三大」の肩付きを持つ書き入れ（いわゆる青墨書き入れ）は、どれも完全な走り書きである。既存の注に惜しげもなく抹消線を引き、既存の本文行間に大きな文字で書き入れている。「三大」講義の受講時に、その口述を速記していったものかと思われるのである。

かかる穂久邇本は、喻えてみれば、早々に本家を出て独立した長男のようなものではなかったか。そして本家に残った弟たち（あるいはその系列を引く本）が書陵部本・青谿書屋本・白水旧蔵本である。そして本家を出た穂久邇本に三大書き入れが加わったのちの忠実なお弟子さんたちが、国会本・万治奥書本・九州大学本と考えることができるのではあるまいか。なお、これら二つの系列が時に交差することもあったことを示しているのが、部分的ではあるものの、三大書き入れを取り入れている尊経閣文庫本「紅葉賀」や常磐松文庫本「空蟬」「夕顔」等のようにである。

最後に、もう一度最初の問題に立ち戻りたい。常磐松本とかなりな親近度を示す竹苞楼本は、『覚勝院抄』諸伝本中において、どのように定位すればよいのだろうか。

従来の分類説によれば、常磐松本は〈後期増補本類〉とされてきた。しかし新たに発見された残欠本である該書、後代書き入れの増注など見られない該書を、常磐松本と同じ〈後期増補本類〉に振り分けることはできない。では〈穂久邇本系〉か〈流布通行本系〉かといえば、「幻」「匂宮」においては、穂久邇本をはじめとして、諸本いずれも肝心の〈三大書き入れ〉（青墨書き入れ）が無く、振り分けの基準となるべき書き入れ自体が無いのだからこれまた判断できない。よって竹苞楼本は従来の分類法では処理しきれないということになる。この場合は、『覚勝院抄』に

後代どのような加筆・増注がなされていったのかという、いわば後代の享受史からみた分類法ではなく、『覚勝院抄』のそもそもの成立時点に立ち戻つての、新たな分類法が必要なようである。

そこで諸本を並べて比較した結果、「幻」「匂宮」において現行諸本は二つのグループに大別できることが分かった。一方は穂久邇本グループ、そしてもう一つは竹苞楼本を初めとするグループである。この二グループは本文異同の傾向から、物語本文に対する校合・訂正などが行われた時期に、それと相前後して複本用に作られたものであらうと思われた。竹苞楼本は穂久邇本ともども、それぞれのグループのいわば親本的存在であらう。穂久邇本グループは穂久邇本の本文を訂正も含めてそのまま写すことが多かったが、竹苞楼本グループは竹苞楼本に記された訂正結果のみを写すことが多かったようである。

〔注〕(1) 永井一彰・上野英子「調査報告九十五 新出資料竹苞楼蔵板木台帳紙背『覚勝院抄(断簡)』—影印と解題—」(平成二十三年三月文芸資料研究所「年報」三十号)

上野英子「調査報告九十五—二 新出資料竹苞楼旧蔵板木台帳紙背『覚勝院抄(断簡)』—翻刻付校異—」(平成二十四年三月文芸資料研究所「年報」三十一号)

(2) 野村精一「穂久邇文庫本 覚勝院抄について」(平成三年 汲古書院刊『源氏物語聞書 覚勝院抄』別冊)。

岩坪健「三条西家の講釈—穂久邇文庫所蔵『覚勝院抄』をめぐって—」(平成四年十二月、神戸親和女子大学「親和国文」二十七号)

(3) 略号は全て池田亀鑑『源氏物語大成』(昭和四十六年版・中央公論社)のそれを踏襲した。また独自に河内

本系諸本には（）印、別本には「」印を冠しておいた。以下同様。

- (4) 詳細は、拙稿「穂久邇文庫本にみる『源氏物語聞書（覚勝院抄）の基底―物語本文と聞書を中心に―」（一九九四年 新典社『論集 源氏物語とその前後 五』所収）参照。